

---

# 「わしは龍馬ぜよ！」パート?

河 美子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「わしは龍馬ぜよ！」パート？

### 【Nコード】

N7051R

### 【作者名】

河 美子

### 【あらすじ】

東京に着きました。亮子と龍馬ストラップ。

亮子と龍馬ストラップが江戸に着く。

『いやあ、これはたまるか！』

「すごいでしょ」

「高層ビルが立ち並ぶ江戸に、開いた口が塞がらんぜよ。」

昔から江戸は洒落た町やったが、これはたまるか。人は縦に住むことになったのか。昔は長屋がずらっと並んではつつあん、熊さんが『ほいつ』と言ったら出て話せたのに。これじゃ、みんなほいっと出たら死ぬぜよ。

亮子たちはまたバスに乗って駅へ着く。

先生が前で話しゆうろう、誰っちゃあ聞かん。気の毒やのう。

『おまんら、話と言うのは目で聞くもんじゃ！』

「ちよつと、やめてよ。龍馬の声は私しか聞こえないんだってば」  
そうじゃった。つまらん。そう言っていると、一人の少年がこつちを見ゆう。びっくりした顔で。

亮子は誰も迎えが来ないみたいで、一人で電車で帰るらしい。

『一人で帰るのか？』

「うん、パパもママも仕事だもん」

『パパとママって、何ぜよ』

「父上と母上」

『なんでパパとママって言うがな？ ちゃんと日本語を使え！ そんな赤ん坊が言うような言葉しか使えんがかな？』

「いいじゃん、そんなこと。それより、なんか視線感じる。あの子が見てる」

亮子の視線の先にさっきの少年。

「あ、あ、近寄って来た」

身構える亮子。わしも緊張する。守れるろうか。ストラップで。

ブラブラしよってカッコがつかん。

「あの、君」

「は、はい？」

「そのストラップ話せるの？」

「え？ 聞こえるの？」

「うん、男の声で」

『およよ、おまんも聞こえるかよ。わしの声が』

「うん」

『わしは坂本龍馬』

「嘘みたいだなあ。確かに龍馬の格好だけどプラスチックのストラップだろ？」

『失敬な！』

「悪い悪い。すごい精密な機械が入ってるんだね」

『機械？ 違う。本物の坂本龍馬ぜよ』

「えーっ、江戸から明治にかけて生き抜いた偉人だろう？」

『過去形で言うな！』

しかし、亮子よりは賢そうだな。亮子はなぜか目がトロンとしてる。

ここで亮子が介入してきた。

「私、桜井亮子」

「あ、僕は下柳龍平しげやなぎりゅうへい」

「何年生？」

「僕は丁高校三年、君は？」

「私S女子高二年」

「よろしく」

「こちらこそ」

なんじゃ、この二人。気安く声を掛け合って。フン。

「どこで手に入れたの？」

「こら！ 手に入れたのって、人をおもちゃのように言うな！

「いいなあ、この精密さ。受け答えができるなんて。欲しいなあ」

「貸してあげようか？」

なんじゃと！ 人を何と思うちゅうぜよ！

「このストラップね、高知で買ったの。五八〇円」

「やつすい！」

『人を安物のように言うな！』

すると、亮子はケータイから外しだした。おいおい、どうする気な！

「三日貸してあげる！」

「えっ、いいの？」

いかんいかん、男なんかのおもちゃにされとうない！

簡単に渡すのか……。

どうせ、わしはストラップさ。何が三日貸してあげるだ！

「じゃ、日曜日にこの駅で二時に待ってる」

「うん、わかった。ありがとう。メルアド教えてくれるかな」

「いいわよ」

何がいいわよだ！ いいはずがないろう。わしの意見はどうなる。

聞かんが？ あっそう。ふん。

「何だか怒ってるみたいだね、ストラップ。話さないよ」

「気まぐれなの」

ぶぶ、気まぐれなのだと！ くっそー。もう、話しちゃらん。簡単に人を貸し借りするな！

だが、この少年、よく見るときりつとした男前だな。

わしもモテたが、この野郎もモテそうだ。亮子が簡単に惚れるのも無理はないかもしれん。

「じゃ、龍馬バイバイ。チュ」

ほーほーほー。

「あ、何だか赤くなつたぞ！ 面白いなあ」

『面白くない！』

「しゃべった！ すごいなあ。ゲーム機より面白い！」

ふん、もう話すもんか。男とじゃ話も盛り上がりはない。

亮子を見ると、二本指を立ててピースじゃと。なんじゃそれ。

龍平とやら、亮子と違ってカバンの中が綺麗じゃのう。すっきり整頓できてるじゃないか。亮子は何でも突っ込むから、バッグとやらはぐちゃぐちゃだった。

龍平は電車に乗ると、人がいない最後尾に移って外を見せてくれた。

『速いのー。それにしても人、人、人』

「うん、多過ぎだよ。都会に人が集まり過ぎてる」

『まあ、あれから時代が過ぎて人が増えるのは当然だ』

「すごいなあ、思考できてる」

ああ、もう。人をアホのように言うなよ。思考するに決まってるだろ！

頭を触るな！ 別に何も隠してないのに、やたらと分解したそうな顔。怖いなあ。

「この頭の中に入ってるのかなあ。五八〇円なのに」

『それはたまたま五八〇円と言う値段がっただけよ。わしは値段などつけねばあすごい男ぞ！』

「うん、そうみたいだね。亮子ちゃん、よく貸してくれたなあ」

『ほんまよ！ 人のことをなんと思うちゅうるう』

「ははは、いじけてる」

『うるさい！』

龍平の家は高台に建っており、駅から一〇分ほど歩いたところだった。

「ただいま」

「お帰り」

これまた、美人の母上だ。ほう、化粧もしていて綺麗だなあ。いい匂いだ。

「あら、ストラップ買ったの？」

「ううん、借りてるの」

「えっ？　なんで？」

「面白いから」

「おかしな子ね」

撫でるな！

わしの体を。

気持ちよすぎると……。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7051r/>

---

「わしは龍馬ぜよ！」パート?

2011年3月18日10時55分発行